

平成20年4月7日

薬事・食品衛生審議会
食品衛生分科会長 吉倉 廣 殿

薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会
農薬・動物用医薬品部会長 大野 泰雄

薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会
農薬・動物用医薬品部会報告について

平成20年1月23日厚生労働省発食安第0123009号をもって諮問された、食品衛生法（昭和22年法律第233号）第11条第1項の規定に基づくフルトラニルに係る食品規格（食品中の農薬の残留基準）の設定について、当部会で審議を行った結果を別添のとおり取りまとめたので、これを報告する。

フルトラニル

1. 品目名：フルトラニル (Flutolanil)

2. 用途：殺菌剤

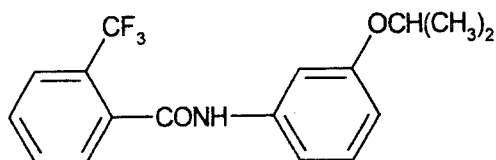
アミド系殺菌剤である。作用機構として、ミトコンドリア内の電子伝達系の複合体Ⅱに作用し、担子菌類に選択的に殺菌活性を示すと考えられている。

3. 化学名：

α, α, α -trifluoro-3'-isopropoxy-*o*-toluanilide (IUPAC)

N-[3-(1-methylethoxy)phenyl]-2-(trifluoromethyl)benzamide (CAS)

4. 構造式及び物性



分子式 $C_{17}H_{16}F_3NO_2$

分子量 323.3

水溶解度 6.63mg/L. (20°C)

分配係数 $\log_{10}Pow=3.77$ (25°C)

(メーカー提出資料より)

5. 適用病害虫の範囲及び使用方法

本薬の適用病害虫の範囲及び使用法は以下のとおり。

使用量となっているものについては、今回農薬取締法（昭和 23 年法律第 82 号）に基づく適用拡大申請がなされたものを示している。

また、「国外で使用される農薬等に係る残留基準の設定及び改正に関する指針について」（平成 16 年 2 月 5 日付け食安発第 0205001 号）に基づき、高麗人参（その他の野菜）に係る残留基準の設定が要請されている。

①国内における使用方法

(1) 1.5%フルトラニル粉剤

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フルトラニルを含む農薬の総使用回数
稲	紋枯病	3~4kg/10a	収穫 14 日前まで	3 回以内	散布	3 回以内 (小包装投入は 1 回以内)
	疑似紋枯症 (褐色菌核病菌)	4kg/10a				
	疑似紋枯症 (褐色紋枯病菌)					
	疑似紋枯症 (赤色菌核病菌)					
ばれいしょ	黒あざ病	種いも重量の 0.3%	植付前	1 回	種いも粉衣	1 回
小麦	雪腐小粒菌核病	4kg/10a	根雪前	2 回以内	散布	4 回以内 (根雪前は 2 回以内、 融雪後は 2 回以内)
	赤さび病		収穫 14 日前まで			
レタス	すそ枯病		収穫 7 日前まで	3 回以内		
こんにゃく	白絹病	20kg/10a	植付時及び培土時 (収穫 30 日前まで)	2 回	培土時： 全面土壌散布 又は作条散布 植付時： 土壌混和	2 回以内 (植付時は 1 回以内、 植付後は 1 回以内)
ふき		40kg/10a	定植時	1 回	土壌混和	2 回以内 (土壌混和は 1 回以内)
ねぎ		15~ 20kg/10a	土寄せ時 (収穫 30 日前まで)	3 回以内	株元散布	4 回以内 (種子粉衣は 1 回以内、 全面土壌散布及び株元 散布は合計 3 回以内)

(2) 2.0%フルトラニル粉剤

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フルトラニルを含む農薬の総使用回数
稲	紋枯病 疑似紋枯症 (褐色菌核病菌) 疑似紋枯症 (褐色紋枯病) 疑似紋枯症 (赤色菌核病菌)	3~4kg/10a	収穫 14 日前まで	3 回以内	散布	3 回以内 (小包装投入は 1 回以内)
ねぎ	オオシロカラカサタケ	15kg/10a	は種前		全面土壌 散布	4 回以内 (種子粉衣は 1 回以内、 全面土壌散布及び株元 散布は合計 3 回以内)
	白絹病	10~ 15kg/10a	土寄せ時 但し、収穫 30 日前まで	株元散布		
こんにゃく		3kg/10a	培土時 但し、収穫 30 日前まで	1 回		2 回以内 (植付前は 1 回以内、 植付後は 1 回以内)

(3) 15.0%フルトラニル乳剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フルトラニルを含む農薬の総使用回数
稲	紋枯病	1000~1500 倍	収穫 14 日前まで	3 回以内	散布	3 回以内 (小包装投入は 1 回以内)

(4) 25.0%フルトラニル水和剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フルトラニルを含む農薬の総使用回数
なし	赤星病	250～500倍	収穫21日前まで	3回以内	散布	3回以内
稲	紋枯病 疑似紋枯症 (褐色菌核病菌) 疑似紋枯症 (赤色菌核病菌)	1000倍	収穫14日前まで			3回以内 (小包装投入は1回以内)
小麦	雪腐小粒菌核病	400倍	根雪前まで			2回以内
みつば (水耕栽培)	立枯病	1000倍	収穫30日前まで	2回以内 (種子粉衣は1回以内、は種後は1回以内)		
ばれいしょ	黒あざ病	50～100倍	植付前	1回	10分間種いも浸漬又は種いもに十分量散布	1回
きゅうり トマト ミニトマト なす	苗立枯病 (リゾクトニア菌)	500～100倍	は種時～ 子葉展開時	2回以内	希釈液 3L/m ² を土壌面に灌注	2回以内 (種子粉衣は1回 以内、土壌灌注 は1回以内)
		種子重量の 0.5～1.0%	は種前		種子粉衣	
ピーマン (施設栽培)		500～100倍	は種時～ 子葉展開時	2回以内	希釈液 3L/m ² を土壌面に灌注	3回以内 (種子粉衣は1回 以内、土壌灌注 は2回以内)
		種子重量の 0.5～1.0%	は種前		種子粉衣	
ピーマン (露地栽培)	500～100倍	は種前	1回	希釈液 3L/m ² を土壌面に灌注	5回以内 (種子粉衣は1回 以内、は種時の 土壌灌注は2回以 内、は種後の株元 灌注は3回以内)	
	種子重量の 0.5～1.0%	は種前		種子粉衣		
野菜類 豆類(種実)	リゾクトニア菌 による病害 (苗立枯病等)	種子重量の 0.5～1.0%	は種前	1回	種子処理機に よる種子粉衣	1回

(5) 50.0%フルトラニル粉剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フルトラニルを含む農薬の総使用回数
稲	紋枯病	2000～2500倍	収穫14日前まで	3回以内	散布	3回以内 (小包装投入は1回以内)
小麦	雪腐小粒菌核病	800倍	根雪前まで	2回以内		4回以内 (根雪前は2回以内、融雪後は2回以内)
みつば (水耕栽培)	立枯病	2000倍	収穫30日前まで			2回以内 (種子粉衣は1回以内、は種後は1回以内)
ばれいしょ	黒あざ病	100～200倍	植付前	1回	瞬時～10分間 種いも浸漬処理	1回
		10倍 (使用量は種いも 1kg当り希釈液 0.5～1mL)			種いも吹付け処理 (帯電式少量 噴霧装置使用)	
なす	苗立枯病 (リゾクトニア菌)	1000～2000倍	は種時～ 子葉展開時		希釈液 3L/m ² を土壌面に灌注	2回以内 (種子粉衣は1回 以内、土壌灌注 は1回以内)
きゅうり トマト		種子重量の 0.3～0.5%	は種前		種子粉衣	
ほうれんそう		1000～2000倍	は種直後	希釈液 3L/m ² を土壌面に灌注		
		種子重量の 0.5～1.0%	は種前	種子粉衣		
ふき	白絹病	1000～2000倍	定植時及び生育時期 (但し収穫30日前まで)	2回以内	希釈液 3L/m ² を土壌面に灌注	2回以内 (土壌混和は1回以内)
なし	赤星病	500～1000倍	収穫21日前まで	3回以内	散布	3回以内

(6) 20.0%フルトラニル水和剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	散布液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フルトラニルを含む農薬の総使用回数
稲	紋枯病	1000～1500倍	—	収穫14日前まで	3回以内	散布	3回以内 (小包装投入は1回以内)
		300倍	25L/10a				
		原液	120mL/10a			空中散布	
		30倍	3L/10a				
		8倍	800mL/10a				
	類似紋枯症 (褐色菌核病菌) 類似紋枯症 (赤色菌核病菌) 類似紋枯症 (褐色紋枯病菌)	1000倍	—			散布	

(7) 40.0%フルトラニル水和剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フルトラニルを含む農薬の総使用回数
てんさい	葉腐病	250倍	25L/10a	収穫14日前まで	4回以内	散布	5回以内 (定植前の灌注は1回以内、散布は4回以内)
	葉腐病 根腐病	1000倍					
	根腐病	200倍		定植前	1回	ペーパーポット 1冊当たり1L (3L/m ²) 灌水	
キャベツ	株腐病	2000倍	—	収穫7日前まで	3回以内	散布	4回以内 (種子粉衣は1回以内、定植前の土壌混和は1回以内、散布は3回以内)
しょうが	紋枯病			収穫3日前まで	5回以内		5回以内
葉しょうが					3回以内		3回以内
レタス	すそ枯病	1000～2000倍	—	収穫7日前まで	3回以内	散布	4回以内 (種子粉衣は1回以内、は種後は3回以内)

(7) 40.0%フルトラニル水和剤 (つづき)

作物名	適用病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	フルトラニル を含む農薬の 総使用回数
ばれいしょ	黒あざ病	100～ 200 倍		植付前	1 回	瞬時～10 分間 種いも浸漬 種いも 100kg 当り 希釈液 3L 散布	1 回
だいず	白絹病	1000～ 2000 倍		移植時及び生育期 但し、収穫7日前まで	3 回以内	株元散布 (3L/m ²)	4 回以内 (種子粉衣は 1 回以 内、は種後は 3 回以内)
えだまめ				移植時及び生育期 但し、収穫21日前まで			
ねぎ	オオシロカラカサタケ	2000 倍		土寄せ時 但し、収穫30日前まで			
				収穫 30 日前まで			
ピーマン (露地栽培)	白絹病	1000 倍		収穫前日まで			
みょうが (花穂)	紋枯病	2000 倍		収穫 3 日前まで	2 回以内	土壌灌注 (3L/m ²)	2 回以内
みょうが (茎葉)				みょうが (花穂) の収穫 3 日前まで 但し、花穂を収穫し ない場合にあつては 開花終了まで			

(8) 7.0%フルトラニル粒剤

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フルトラニルを含む農薬の総使用回数
稲	紋枯病	3～4kg/10a	出穂 30～10 日前 但し、収穫 45 日前まで	3 回以内	湛水灌注	3 回以内 (小包装投入は 1 回以内)
ねぎ	白絹病	4kg/10a	土寄せ時 但し、収穫 30 日前まで		株元散布	4 回以内 (種子粉衣は 1 回以内、 全面土壌散布及び株元 散布は合計 3 回以内)
	オシロカラカサタケ		は種前		全面土壌散布	

(9) 21.0%フルトラニル粒剤

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フルトラニルを含む農薬の総使用回数
稲	紋枯病	1kg/10a	出穂 30～10 日前まで (収穫 45 日前まで)	3 回以内	散布 無人ヘリコプター による散布	3 回以内 (小包装投入 は 1 回以内)

(10) 21.0%フルトラニル粒剤

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フルトラニルを含む農薬の総使用回数
稲	紋枯病	小包装 (パック) 20 個 (1kg) /10a	出穂 30～10 日前まで (収穫 45 日前まで)	1 回	水田に小包装 (パック) のま ま投げ入れる。	3 回以内 (小包装投入 は 1 回以内)

(11) 22.0%フルトラニル油剤

作物名	適用病害虫	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フルトラニルを含む農薬の総使用回数
稲	紋枯病	0.7～1L/10a	出穂 35～15 日前 (収穫 45 日前まで)	3 回以内	原液を田面 水に滴下	3 回以内 (小包装投入 は 1 回以内)

②海外における使用方法

15%フルトラニル乳剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数	使用方法
いちご	芽枯病	1000 倍	収穫 3 日前まで	2 回以内	散布
高麗人参	立枯病	1000 倍	収穫 163～166 日前まで	1 回	

6. 作物残留試験

(1) 分析の概要

① 分析対象の化合物

- ・フルトラニル

② 分析法の概要

試料をアセトンで抽出し、濃縮後、凝固処理し、n-ヘキサンで抽出する。次にシリカゲルまたはフロリジルカラムクロマトグラフィーにより精製し、ガスクロマトグラフ (NPD または FTD^{註)}) で定量する。

注) NPD: Nitrogen Phosphorus Detector (窒素リン検出器)

FTD: Flame Thermionic Detector (アルカリ熱イオン化検出器)

定量限界 0.004～0.2 ppm

(2) 作物残留試験結果

① 水稲

水稲 (玄米) を用いた作物残留試験 (2 例) において、25%水和剤の 500 倍希釈液を計 3 回散布 (150L/10a) したところ、散布後 14～48 日の最大残留量^{註1)}は 0.213、0.253 ppm であった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

水稲 (稲わら) を用いた作物残留試験 (2 例) において、25%水和剤の 500 倍希釈液を計 3 回散布 (150L/10a) したところ、散布後 14～48 日の最大残留量は 8.38、6.63 ppm であった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

水稲 (玄米) を用いた作物残留試験 (2 例) において、7%粒剤を計 3 回散布 (4kg/10a) したところ、散布後 44^{註2)}～60 日の最大残留量は 0.034、0.050 ppm であった。

水稲 (稲わら) を用いた作物残留試験 (2 例) において、7%粒剤を計 3 回散布 (4kg/10a) したところ、散布後 44～60 日の最大残留量は 2.50、12.88 ppm であった。

水稻（玄米）を用いた作物残留試験（2例）において、7%粒剤を計2回散布（4kg/10a）及び21.0%粒剤を1回散布（1kg/10a）したところ、散布後42^{注2}、45日の最大残留量は0.07、0.02 ppmであった。

水稻（稲わら）を用いた作物残留試験（2例）において、7%粒剤を計2回散布（4kg/10a）及び21.0%粒剤を1回散布（1kg/10a）したところ、散布後42、45日の最大残留量は1.93、8.17 ppmであった。

水稻（玄米）を用いた作物残留試験（2例）において、1.5%粉剤を計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14～45日の最大残留量は0.033、0.063 ppmであった。

水稻（稲わら）を用いた作物残留試験（2例）において、1.5%粉剤を計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14～45日の最大残留量は0.82、2.40 ppmであった。

水稻（玄米）を用いた作物残留試験（4例）において、2%粉剤を計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14～38日の最大残留量は0.20、0.18、0.03、0.08 ppmであった。

水稻（稲わら）を用いた作物残留試験（4例）において、2%粉剤を計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14～38日の最大残留量は1.72、4.02、3.29、1.96 ppmであった。

水稻（玄米）を用いた作物残留試験（2例）において、15%乳剤の1,500倍希釈液を計3回散布（150L/10a）したところ、散布後14～56日の最大残留量は0.049、0.385 ppmであった。

水稻（稲わら）を用いた作物残留試験（2例）において、15%乳剤の1,500倍希釈液をを計3回散布（150L/10a）したところ、散布後14～56日の最大残留量は0.76、0.66 ppmであった。

水稻（玄米）を用いた作物残留試験（2例）において、65%顆粒水和剤の13倍希釈液を1回航空散布（0.8L/10a）したところ、散布後40、62日の最大残留量は0.008、0.011 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

水稻（稲わら）を用いた作物残留試験（2例）において、65%顆粒水和剤の13倍希釈液を1回航空散布（0.8L/10a）したところ、散布後40、62日の最大残留量は0.44、3.24 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

水稻（玄米）を用いた作物残留試験（2例）において、50%水和剤の2,000倍希釈液を1回散布（160L/10a）したところ、散布後40、62日の最大残留量は0.051、<0.005 ppmであった。

水稻（稲わら）を用いた作物残留試験（2例）において、50%水和剤の2,000倍希釈液を1回散布（160L/10a）したところ、散布後40、62日の最大残留量は

1.02、1.01 ppmであった。

水稻（玄米）を用いた作物残留試験（2例）において、11%フロアブルを1回航空散布（0.3L/10a）したところ、散布後41、43日の最大残留量は0.049、0.130 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

水稻（稲わら）を用いた作物残留試験（2例）において、11%フロアブルを1回航空散布（0.3L/10a）したところ、散布後41、43日の最大残留量は1.61、1.18 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

水稻（玄米）を用いた作物残留試験（2例）において、50%水和剤の2,000倍希釈液を1回散布（132L/10a）したところ、散布後41、43日の最大残留量は0.170、0.172 ppmであった。

水稻（稲わら）を用いた作物残留試験（2例）において、50%水和剤の2,000倍希釈液を1回散布（132L/10a）したところ、散布後41、43日の最大残留量は0.58、0.78 ppmであった。

水稻（玄米）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの8倍希釈液を計3回無人ヘリ散布（0.8L/10a）したところ、散布後14、16日の最大残留量は0.116、0.314 ppmであった。

水稻（玄米）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの5倍希釈液を計3回無人ヘリ散布（0.8L/10a）したところ、散布後15、14日の最大残留量は0.040、0.035 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

水稻（玄米）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの300倍希釈液を計3回散布（25L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は0.20、0.17 ppmであった。

水稻（稲わら）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの300倍希釈液を計3回散布（25L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は1.80、1.46 ppmであった。

水稻（玄米）を用いた作物残留試験（2例）において、22%油剤を計3回散布（1L/10a）したところ、散布後50、43^{注2)}日の最大残留量は0.02、0.07 ppmであった。

水稻（稲わら）を用いた作物残留試験（2例）において、22%油剤を計3回散布（1L/10a）したところ、散布後50、43日の最大残留量は0.47、4.11 ppmであった。

水稻（玄米）を用いた作物残留試験（2例）において、7%粒剤を計2回散布（4kg/10a）及び22.0%油剤を1回散布（1L/10a）したところ、散布後50、43^{注2)}日の最大残留量は0.06、0.18 ppmであった。

水稻（稲わら）を用いた作物残留試験（2例）において、7%粒剤を計2回散布

(4kg/10a) 及び 22.0%油剤を 1 回散布 (1L/10a) したところ、散布後 50、43 日の最大残留量は 1.55、7.20 ppm であった。

水稻 (玄米) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%フロアブルの 1,000 倍希釈液を計 3 回散布 (150L/10a) したところ、散布後 14~28 日の最大残留量は 0.49、0.34 ppm であった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

水稻 (稲わら) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%フロアブルの 1,000 倍希釈液を計 3 回散布 (150L/10a) したところ、散布後 14~28 日の最大残留量は 6.34、6.46 ppm であった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

②小麦

小麦 (脱穀した種子) を用いた作物残留試験 (2 例) において、25%水和剤の 500 倍希釈液を計 4 回散布 (150L/10a) したところ、散布後 13~56 日の最大残留量は 0.163、0.508ppm であった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

小麦 (脱穀した種子) を用いた作物残留試験 (1 例) において、1.5%粉剤を計 4 回散布 (4kg/10a) したところ、散布後 13、20 日の最大残留量は 0.036 ppm であった。ただし、この試験は適用範囲内で行われていない。

小麦 (脱穀した種子) を用いた作物残留試験 (1 例) において、50%水和剤の 800 倍希釈液を計 2 回散布 (100L/10a) 及び 1.5%粉剤を計 2 回散布 (4kg/10a) したところ、散布後 13^{注2)}、20 日の最大残留量は 0.054ppm であった。

小麦 (脱穀した種子) を用いた作物残留試験 (1 例) において、1.5%粉剤を計 4 回散布 (4kg/10a) したところ、散布後 16~23 日の最大残留量は 0.015 ppm であった。ただし、この試験は適用範囲内で行われていない。

小麦 (脱穀した種子) を用いた作物残留試験 (1 例) において、50%水和剤の 800 倍希釈液を計 2 回散布 (100L/10a) 及び 1.5%粉剤を計 2 回散布 (4kg/10a) したところ、散布後 16~23 日の最大残留量は 0.016 ppm であった。

小麦 (脱穀した種子) を用いた作物残留試験 (1 例) において、50%水和剤の 800 倍希釈液を計 2 回散布 (100L/10a) 及び 1.5%粉剤を計 2 回散布 (4kg/10a) したところ、散布後 15~55 日の最大残留量は <0.005 ppm であった。

③大豆

大豆 (乾燥子実) を用いた作物残留試験 (2 例) において、50%水和剤の 1,000 倍希釈液を計 2 回灌注 (3L/m²)、及び 1 回散布 (120, 200L/10a) したところ、散布後 7~21 日の最大残留量は 0.072、0.198 ppm であった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

大豆（乾燥子実）を用いた作物残留試験（2例）において、40%フロアブル剤の1,000倍希釈液を1回土壌散布、1回株元散布（3L/m²）及び1回散布（200L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は<0.01、0.15 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

④ばれいしょ

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、25%水和剤の10倍希釈液を1回種いも浸漬したところ、浸漬後79、100日の最大残留量は<0.005、<0.005 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、25%水和剤の25倍希釈液を計1回種いも浸漬したところ、浸漬後79、100日の最大残留量は<0.005、<0.005 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、40%水和剤の8倍希釈液及び1回帯電式噴霧（生重量の0.1%）したところ、吹きつけ後139、138日の最大残留量は<0.005、<0.005 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、40%水和剤の80倍希釈液に1回浸漬したところ、浸漬後139、138日の最大残留量は<0.005、<0.005 ppmであった。

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、50%水和剤の10倍希釈液を1回帯電式噴霧（生量の0.1%）したところ、吹きつけ後139、138日の最大残留量は<0.005、<0.005 ppmであった。

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、50%水和剤の100倍希釈液に1回浸漬したところ、浸漬後139、138日の最大残留量は<0.005、<0.005 ppmであった。

⑤こんにゃくいも

こんにゃくいも（球茎）を用いた作物残留試験（1例）において、1.5%粉剤を1回粉衣（種芋重量の0.5%）、及び1回土壌混和（40kg/10a）したところ、混和後160日の最大残留量は0.032 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

こんにゃくいも（球茎）を用いた作物残留試験（1例）において、1.5%粉剤を1回土壌混和（20kg/10a）、及び1回土壌混和（20kg/10a）したところ、混和後144日の最大残留量は0.008ppmであった。

⑥てんさい

てんさい（根部）を用いた作物残留試験（2例）において、1.5%粉剤を1回苗床混和（300g/土壌 300L）、及び50%水和剤の1,000倍希釈液を計4回散布（200L/10a）したところ、散布後21～30日の最大残留量は0.120、0.334ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

てんさい（根部）を用いた作物残留試験（2例）において、40%フロアブルの1,000倍希釈液を計4回散布（100L/10a）したところ、散布後14～29日の最大残留量は0.04、0.04ppmであった。

てんさい（根部）を用いた作物残留試験（2例）において、40%フロアブルの200倍希釈液を1回灌注（3L/m²）、及び1,000倍希釈液を計4回散布（100L/10a）したところ、散布後14～21日の最大残留量は0.02、0.02ppmであった。

てんさい（根部）を用いた作物残留試験（2例）において、40%フロアブルの250倍希釈液を計4回散布（25L/10a）したところ、散布後14日後の最大残留量は、0.02、<0.01 ppmであった。

てんさい（根部）を用いた作物残留試験（2例）において、40%フロアブルの1,000倍希釈液を計4回散布（100L/10a）したところ、散布後14日後の最大残留量は、0.04、<0.01 ppmであった。

⑦キャベツ

キャベツ（葉球）を用いた作物残留試験（2例）において、50%水和剤の1,000倍希釈液を計3回散布（150～200L/10a）したところ、散布後7～28日後の最大残留量は、0.32、2.69 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

キャベツ（葉球）を用いた作物残留試験（2例）において、40%フロアブルの2,000倍希釈液を計3回散布（300L/10a）したところ、散布後7～21日後の最大残留量は、0.43、0.47 ppmであった。

キャベツ（葉球）を用いた作物残留試験（2例）において、1.5%粉剤を1回土壌混和（30kg/10a）、及び40%フロアブル剤の2,000倍希釈液を計3回散布（200, 150～200L/10a）したところ、散布後7～21日後の最大残留量は、0.10、0.04 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

⑧レタス

レタス（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、1.5%粉剤を計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後7～28日後の最大残留量は、0.577、1.40 ppmであった。

レタス（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、50%水和剤の1,000倍希釈液を計3回散布（150L/10a）したところ、散布後7～28日後の最大残留量は、3.36、1.38 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

レタス（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、40%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布（150, 200L/10a）したところ、散布後7～21日後の最大残留量は、1.60、0.13 ppmであった。

レタス（茎葉）を用いた作物残留試験（1例）において、1.5%粉剤を1回作条混和（30kg/10a）及び、40%フロアブル剤の1,000倍希釈液を計3回散布（300L/10a）したところ、散布後7～21日後の最大残留量は、0.67 ppmであった。ただし、この試験は適用範囲内で行われていない。

⑨ふき

ふき（葉柄）を用いた作物残留試験（2例）において、50%水和剤の1,000倍希釈液を計2回灌注（3L/m²）したところ、散布後30～61日後の最大残留量は、0.712、0.36 ppmであった。

⑩ねぎ

ねぎ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、1.5%粉剤を計3回散布（20kg/10a）したところ、散布後33、31日後の最大残留量は、<0.01、0.36 ppmであった。

⑩根深ねぎ

根深ねぎ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、40%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布（150, 300L/10a）したところ、散布後28日後の最大残留量は、0.23、0.50 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

⑪葉ねぎ

葉ねぎ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、40%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布（300, 200L/10a）したところ、散布後28日後の最大残留量は、0.22、0.06 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

⑫みつば

みつば（茎葉）を用いた作物残留試験（1例）において、50%水和剤の2,000倍希釈液を1回散布（60L/10a）したところ、散布後28^{注2)}日後の最大残留量は、0.12 ppmであった。

みつば（茎葉）を用いた作物残留試験（1例）において、50%水和剤の2,000倍希釈液を1回散布（60L/10a）したところ、散布後28^{註2)}日後の最大残留量は、0.76 ppmであった。

みつば（茎葉）を用いた作物残留試験（1例）において、50%水和剤の2,000倍希釈液を1回散布（60L/10a）したところ、散布後28^{註2)}日後の最大残留量は、0.46 ppmであった。

⑬ トマト

トマト（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、25%水和剤を1回湿粉衣（種子重量の2%）及び250倍希釈液を1回灌注（3L/m²）したところ、施用後112、103日後の最大残留量は、<0.01、<0.01 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

トマト（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、25%水和剤を1回湿粉衣（種子重量の1%）及び500倍希釈液を1回灌注（3L/m²）したところ、灌注後112、103日後の最大残留量は、<0.01、<0.01 ppmであった。

トマト（果実）を用いた作物残留試験（1例）において、25%水和剤を1回湿粉衣（種子重量の2%）及び250倍希釈液を1回灌注（3L/m²）したところ、施用後111日後の最大残留量は、<0.005 ppmであった。ただし、この試験は適用範囲内で行われていない。

トマト（果実）を用いた作物残留試験（1例）において、25%水和剤を1回湿粉衣（種子重量の1%）及び500倍希釈液を1回灌注（3L/m²）したところ、灌注後111日後の最大残留量は、<0.005 ppmであった。

⑭ ピーマン

ピーマン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、50%水和剤を1回種子粉衣（種子重量の0.5%）及び1,000倍希釈液を計2回灌注（3L/m²）したところ、施用後77、70日後の最大残留量は、<0.01、<0.01 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

ピーマン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、25%水和剤を1回種子粉衣（種子重量の1%）及び500倍希釈液を1回土壌灌注（3L/m²）、並びに40%フロアブルの800倍希釈液を計3回株元灌注（1L/株）したところ、施用後1～14日後の最大残留量は、0.04、0.04 ppmであった。

⑮ なす

なす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、50%水和剤を1回湿粉衣（種子重量の0.5%）及び1,000倍希釈液を1回苗床灌注（3L/m²）したところ、灌注後93、104日後の最大残留量は、<0.01、<0.01 ppmであった。ただし、これ

らの試験は適用範囲内で行われていない。

⑯きゅうり

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、25%水和剤を1回湿粉衣（種子重量の2%）及び250倍希釈液を1回灌注（3L/m²）したところ、施用後63、80日後の最大残留量は、<0.01、<0.01 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、25%水和剤を1回湿粉衣（種子重量の1%）及び500倍希釈液を1回灌注（3L/m²）したところ、施用後63、80日後の最大残留量は、<0.01、<0.01 ppmであった。

⑰ほうれんそう

ほうれんそう（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、50%水和剤を1回湿粉衣（種子重量の1%）及び1,000倍希釈液を1回灌注（3L/m²）したところ、灌注後44、46日後の最大残留量は、0.569、0.834 ppmであった。

⑱しょうが

しょうが（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、50%水和剤の2,000倍希釈液を計5回散布（400、390～480L/10a）したところ、散布後14～37日後の最大残留量は、0.10、0.156 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

しょうが（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、40%フロアブルの2,000倍希釈液を計5回散布（400、300L/10a）したところ、散布後3～14日後の最大残留量は、0.12、0.31 ppmであった。

しょうが（塊茎）を用いた作物残留試験（1例）において、40%フロアブルの2,000倍希釈液を計5回散布（200L/10a）したところ、散布後3～28日後の最大残留量は、0.10 ppmであった。

⑲葉しょうが

葉しょうが（塊茎および上部茎）を用いた作物残留試験（2例）において、40%フロアブルの2,000倍希釈液を計3回散布（200L/10a）したところ、散布後3～14日後の最大残留量は、0.4、0.2 ppmであった。

⑳えだまめ

えだまめ（さや）を用いた作物残留試験（1例）において、50%水和剤の1,000倍希釈液を計2回灌注（3L/m²）及び1回散布（200L/10a）したところ、散布後21～35日の最大残留量で1.20 ppmであった。ただし、この試験は適用範囲内で行われていない。